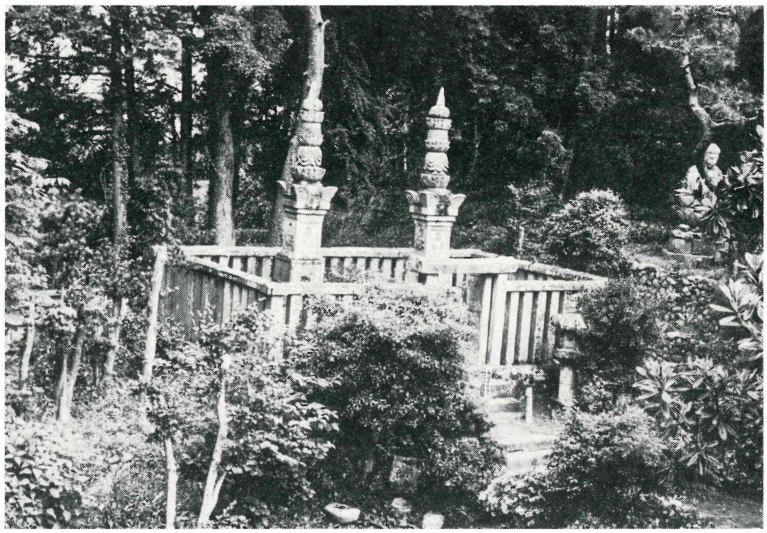
第四章　横須賀城址の規模

安　本　博



写；　横須賀城主大須賀氏の墓塔

目　次

第四章　横須賀城址の規模……安　本　博…五七
第一節　横須賀城略沿革史……五八
第二節　横須賀城の普請と作事……六七
第三節　指定文化財より知る横須賀城……六八
一、古　記　録……六八
二、横須賀城の鯱と鬼瓦……七〇
三、横須賀城二の丸の井戸枠……七〇
四、歴代城主の墓塔……七一
五、横須賀城の城門……七二

写1；横須賀城古絵図

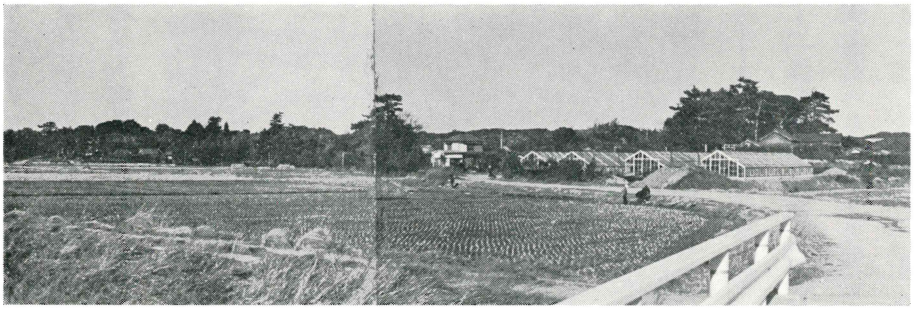
第一節　横須賀城略沿革史

本調査報告書では、横須賀城沿革史を、何れの資料から択ぶかによって、横須賀城址の縄張りと、横須賀城の普譜と、横須賀城の作事の内容が著しく喰違う恐れなしといえない、そういう意味合いから言っても、資料の撰択の重要性

が加重した。地元「白水文庫蔵書」といわれる撰要寺泉敬常氏所蔵本から拾ってみると、「遠州高天神記全」―万延二年酉正月写之―、「高天神記」―文政甲申年三月三日、丸尾喜六昭和七年二月十日鷲山恭平写―、「遠州横須賀総絵図」―中島英太郎氏所蔵写、本多利長城主時代―、「横須賀総絵図」―阿部復馬氏所蔵写、西尾城主時代―、「遠江国風土記伝巻一―十三」―内山眞龍遺稿、岡部譲校閲―明治三十三年三月十五日版―、「静岡県小笠郡勢要覧」―大正十五年六月三十日版―、「遠江国石高調書第一巻―第三巻」―源誉写本等に横須賀城略史の裏付けとなるものが拾えるけれど、横須賀城跡の規模を知る資料に乏しい。（写―1）

写2；「王子権現由来記」表紙

写3；「王子権現由来記」本文



写4；　磐田郡浅羽町にある馬伏塚城址

横須賀城の歴史的沿革を知るうえに、私どもは幸い現地で「郷里雑記」、「横須賀根元記」等を散見し、それに「三河記」、「小笠郡誌」を加えると貴重なこれらの資料と、実地調査によって、横須賀城は、石塁なき城郭として、横須賀城出現とともに、徳川時代二百六十年の長期間、旧態依然たる姿で存続したことが判明する。（写―2―3）

天正二年（一五七四）八月、徳川家康は、大須賀康高に命じ、遠州浅羽の馬伏塚城の修復を図っている。そして天正六年三月十一日、家康は大須賀康高に命じて横須賀城を築城させ、東進する武田勢の歯止めを図ったのである。そして、天正九年三月、大須賀康高は、横須賀城を前線基地として高天神攻撃の火蓋を切った。（写―4）

武田と徳川の遠州での野戦は、天正九年三月二十二日、高天神城の落城とともに終熄し、横須賀城は、大須賀康高の居城として、近世城郭として、生まれかわるべきであった。それなのに、康高は、そのごも、家康の麾下にあって、横須賀城の修築を顧みる暇もなく、天正十六年（一五八八）六月二十三日、六十三才で急死し、撰要寺に葬られることになった。

いま、本調査報告書では、そのごの横須賀城について記す紙数をもたないけれど、その略史は、「小笠郡誌―横須賀城跡」に要領よく、まとめてあるので、次ぎに記すこととする。

横須賀城址（小笠郡誌より）

横須賀城は、天正六年徳川家康の命により、大須賀五郎左衛門康高之を築く、当時高天神城の押えとして経営したるものとす、本城は諸書に馬伏塚と混同して記載す。武徳編年三河後風土記・野史等皆馬伏塚を改めて横須賀と称すと記せるは誤りなり、馬伏塚は山名郡岡山にありしなり、馬伏塚城或云今川家時代小笠原美濃守此に居ると、記伝云、馬伏塚始築時代未詳、三河記六巻云「天正二年八月家康公の下知にて遠州真虫塚の旧墨を新たに築て大須賀五郎左衛門康高を以て彼城を守らせ、且与八郎の旧領城東郡を康高に賜云々」馬伏塚の城を修理せしも高天神に対する押へたること論なく、而して大須賀康高に之を守らせ、天正六年に横須賀城を築き、是亦康高を城主とせり、斯く両城共康高を城主として其地も相近きより世に同地と誤解せられたるものならん。

高天神記に云ふ「天正六年春横須賀にお城取有り、同国馬伏塚の城主大須賀五郎左衛門康高に命じ御自身御縄張十一日より始まり、始めは石津八幡山に当座のかき上げの砦を被成、今の撰要寺の山も可然かと有けれども、公の御見立にて此城に被成云々」又云ふ「高天神の城甲州へ取られて浜松まで浜筋の道の押えなく、馬伏塚は引込過で、殊に海道の道筋へ出悪き城成故用に立たずと有て如此横砂へ張出し、城を築き給ひ高天神と浜松の間の仕切せ云々」是実に馬伏塚と横須賀との関係を知るべし。

伝へ云ふ、初め康高地を熊野神社境内にトし築城せんとするに当り、同社は文武帝勅願の神社にして、数百年の神地たりと聞き、新に城域となさんは恐れ多しとなし、更に松尾山王子権現の地然るべしとなし、之を小谷田なる今の地に移し、天正六年三月十一日より築城同八年に竣工す、於是康高当城々主として家康の命を受けて高天神城を謀る。天正九年三月家康高天神城に迫る、城徳川軍の圧迫を受る殆ど八年、其間徳川、武田両軍の対陣ありしも、勝頼長篠大敗の後を受けて軍気振はず、天正九年三月二十二日城陥る、勝頼救ふ能はず、高天神城已に陥り、城飼郡は全く徳川氏に帰し康高命を承けて之を領知す、於是城下市街を創成し、農耕を勧め荒無を開拓せしめ、数十年戦乱の巷たりし地も、人民稍々其堵に安んじて生業に就くことを得たり、天正十六年康高卒す、山崎撰要寺に葬る、同寺は康高の創建に係りて其開基たり、康高心を民生に用い治績頗る多し、領内の人民相伝え今に至りて其徳沢を称す、嗣子出羽守忠政嗣ぎ当城主たり、天正十八年徳川氏封を関東に移す。忠政従て上総久留里に移る。豊臣氏渡瀬左衛門佐詮繁に当城を賜ふ、暴政多く領民其虐に苦しむ、文禄中詮繁豊臣秀次のことに坐し、所領を没せられ関東に謫せらる。文禄四年有馬玄蕃頭豊氏に当城を賜う、豊氏領内を検田し検地二万八千石余を打出す、領民其苛酷に苦み譏り口碑に残る。関ケ原役後徳川氏豊氏を転封して松平出羽守忠政を封ず。忠政は康高の嗣子にして再び当城々主たり、時に領民久しく虐政に苦しむ、忠政の旧封に復帰するを欣び相率いて遠く国境に迎ふ、慶長十二年忠政卒す、嗣子国千代丸襲ぐ後五郎左衛門忠次と称す、元和元年上州館林に転ず、公命を以て榊原氏を嗣ぐ、当城は徳川常陸介頼宣の所領となる。元和五年頼

宣紀州に移る。於是暫く公領となり中泉代官の支配となり、駿州田中城主六郷兵庫頭城番たり、元和六年松平大隅守重勝当城城主たり、其子重忠嗣ぐ元和八年羽州上の山に転ず、寛永元年徳川忠長所領たり、同九年忠長罪あり国除、同年井上主計頭正就城主たり、同八年正就城主たり、同八年正就卒す、子河内守襲ぐ、此時大渕村の民家を今の地に移し其城を家士の邸宅となし、一番、二番、三番町と称す。正保二年常州笠間に転ず、本多越前守利長城主となる。同三年大渕村下河原を鑿割して埋扒を作る。天和二年出羽山形が転ず、此年西尾隠岐守忠成当城を賜る。爾来相承く八世万八十余年西尾氏代々心を民政に用い、荒蕪を開拓し塩田を作り、砂糖製造を奨励し、殖産上の事蹟少なからず、明治維新に至り徳川氏駿遠に封ぜられ、西尾氏は房州花房に移封す、今代々の城主を左に掲ぐ。

城主

大須賀五郎左衛門康高　天正六年始て本城を築き、馬伏塚城より移り城主となる。天正九年高天神城落去康高の功多きに居る、於是全城飼郡を領す、領知三万石此時郡名を城東と改む、天正十六年卒す山崎撰要寺に葬る。同寺は康高創建開基たり。

同　出羽守忠政　天正十六年康高卒して子なし女子五人あり、長女榊原式部大輔康政に嫁し忠政を生む、此年忠政嫡孫を以て入て大須賀家を襲ぎ城主たり、天正十八年徳川氏関東に移る。忠政従て上総久留里に移封す。

渡瀬左衛門佐詮繁　領知三万石天正十八年城主となる、文禄四年秀次のことに坐し収封せられ、関東に謫せらる。途氷嶺に於て誅せらる、詮繁在城暴政多く、曽て領民大坂に訴へしてとありとて数十人を斬首したることありと云ふ。

有馬玄蕃頭豊氏　領知三万石文禄四年賜る苛政多し、初め城東一円三万石にて大須賀氏所領す、豊氏検地して五万八千五百三十六石に打出す、故に此時代より土地の諺に成て悪きことを玄蕃縄と云しとなり、関ケ原後丹羽福知山に移封す。

松平出羽守忠政　大須賀氏姓を松平と賜ふ、慶長五年再び当城々主となる、領民其旧封に復帰せらるを欣び、遠く国境に迎えて土産を献ず、慶長十二年卒撰要寺に葬る。

同　国千代丸　忠政の子二歳にて家督す、初め大須賀康高卒して子なく榊原康政の子忠政康高の嫡孫を以って大須賀家を嗣ぐ、忠政早く歿し国千代幼にてて家督す、既にして榊原康政大須賀陣中に病歿して嗣なし、家康命じて国千代をして榊原家を嗣がしむ、時に十二歳。於大須賀氏榊原家に合す、元和元年上州館林に移る。徳川常陸介頼宣　慶長十四年駿遠五十五万石に封ぜられ当城其領知に属す、元和五年紀州和歌山に転ず。

元和五年　中泉代官中根七蔵定辰支配す。

松平大隅守重勝　元和六年当城城々主たり。

同　丹後守重忠　元和八年出羽上の山に移る。

井上主計頭正就　元和九年当城主となる。寛永五年卒す。西大渕本源寺に葬る。

同　河内守正利　寛永五年家督、同年亡父正就菩提寺として西大渕に本源寺を開創し、八十五石四斗を寄附す、正保二年常州笠間に転ず。

本多越前守利長　領知五万石、正保二年城主となる。利長著侈を喜び収歛誅求を事とす、天和二年減地を命ぜられ、一万石となり出羽山形に移る。

西尾隠岐守忠成　天和二年信州小諸より当城に移り城主たり、領知二万五千石、正徳三年卒す、西大渕竜眠寺に葬る。

同　隠岐守忠尚　正徳三年家督、延享二年領知五千石加増、寛延二年又五千石加増を賜ひ都合三万五千石となる。忠尚従四位侍従に叙し幕府の老中たり、宝歴十年卒す。

同　主水正忠需　寛政元年卒。

同　山城守忠移　享和元年卒。

同　豊後守忠善　天保元年卒。

同　豊後守忠固　安政四年卒。

同　隠岐守忠愛　文久二年卒。

同　　忠篤　文久二年家督、明治元年房州花房に移る。

横須賀城は松尾山の丘陵に由りて築きたるもの、築城当時は其南方一帯入海を控え又西方山崎撰要寺西側には大なる池ありて城地の要害たり、而して入海の湾を横須賀港と称せしなり、其他瀬海洲渚の地にして又溪州の海に注ぐあり、故に地名皆水に因みて名を得たり、乃ち大渕・今沢・山崎・岡崎・沖之洲・石津等の類皆然り、山崎撰要寺の山号を景江山と云ふ。亦当時の形勢を徴すべし、其地形の大いに変したるは、宝永四年の大地震にして、其際地盤隆起して所謂横須賀港は全然填塞し随て付近一帯の沙地を生して茲に滄桑の変遷を実現せしなり。

横須賀城々主交替及城市沿革に関することを「横須賀三社記」なる日記に記載するもの以て参考とするに足る今左に抄出す。

一、天正六年戊寅三月二十一日より城普譜始まり、浅羽馬伏塚の砦を引て城築あり、辰の年までに大形出来、城取は両頭と云ふ構の由なり。

一、久世三四郎・坂部三十郎・渥美源五・小笠原与左衛門・丹波弥惣・曽根兵左衛門・池田三平御先手高名無比類中にて関東横田にて三百石宛賜はる。横田七人衆と称する。

一、二代大須賀国千代丸八才にて家督相続あり後出羽守忠政と号す、此御代に天守を立つ、城の表向敵土居の上小籔にて堀も水なき掻上堀なり、谷口通りに侍町を立、城前に片平町もあり、石津家中侍町立ち番割も定る云々。註―城址普譜―

一、慶長十二年丁未春忠政公御病気御養生として京都へ御上りなり、九月十一日に伏見にて御逝去御才二十七才、九月二十四日石津にて御葬送あり、御男子国千代丸三才、同年十二月御家督云々。

一、国千代丸を松平五郎左衛門尉忠次公と号す、十一才にて大坂陣に立玉ふ、康高公より以来高名誉れの衆残らず御供なり。

一、元和元年乙卯忠次公、上州館林え十二万石にて所替となり、康高・忠政・忠次三代にて当地三十一年御領知なり、上州館林の領主榊

原式部康政世継なきにより、忠次公榊原の世継に上意を以て御越なり。

一、館林へ召連られし衆は武田十左衛門（知行千三百石）・芝田六左衛門・林吉兵衛、清水善兵衛・木村半左衛門此衆中は知行三百石、岡崎惣十郎・長瀬五左衛門此二人は知行百二十石其外足軽召連られ、残りの知行取は当地に残し置る。

一、忠次公御代に窓泉寺建つ、忠次公御母公法名窓泉依て寺号になる、此寺地に竜眠寺ありしを末寺宿鷺寺と云ふを潰し、権限山を付て竜眠寺を引て立る、依て山号安穏山と替はる元は平等山也。窓泉寺の谷筋大渕村の本高の田地なる故に窓泉寺の山号を大渕山と号する也、横須賀府内城東郡大小社寺領は此三代の御寄付なり。

一、忠政公御代にて当地に井上半右衛門清秀あと小身なる与力あり、屋敷は大渕村の内にあり、半右衛門嫡子半之助十二三才の頃浜松に於て東照神君へ召出され、台徳公の御代に出頭し段々立身あって井上主計頭正就と称す。

一、駿府御城主松平常陸介頼宣公横須賀領知御拝領あって駿府領となる。忠次公の家中衆残らず頼宣公へ召抱へられて何れも横須賀に居住す。此時久世三四郎、坂部三十郎両人ばかり江戸へ下り御直参となる。

一、元和五年頼宣公紀州和歌山へ御国替、横須賀御家中残らず召連れらる。其分今に至りても横須賀衆と云う也。

一、井上主計頭正就当城拝領、御老中故定在府入部なし、寛永五年八月卒去、河内守正利家督、寛永六年己巳六月入部、家中衆大勢引越る故家中屋敷少く、大渕村の百姓屋敷寺々共に引せ侍町立つ。一番町・二番町・三番町となる。

一、正保元年城の惣堀を堀り、石垣塀を築き西大谷河原を上より下へ深く堀割る。

一、本多越前守利長正保二年当城御拝領あり、幼少にて在江戸其時は石見と称す、家中衆ばかり当城へ引越す領知五万石也。

一、正保三年春、大渕村下河原を堀割て埋樋を伏す、戸塚五郎助願を立て埋扒になる。

一、承応二年六月利長公十八才の時に入部也、別腹の舎兄本多内膳西大谷不動下に屋敷を立て駿府の番に勤めらる。知行五千石郡中にあり、同腹の舎弟井上兵庫知行二千石定府也。

一、枕町・小姓町・窓泉谷・小谷田に侍屋敷立つ、大工町も馬場共に出来る、中町北に馬場出来る。

一、寛文六年石津平地にある高き砂山を両脇へ引平けて町屋立つ、足軽町も立つ、同九年御菩提所勇専院潰さる知行百石の寺なり。

一、天和二年西尾隠岐守忠成公二万五千石にて、当城御拝領四月二十七日御入部なり、五月五日三社御参詣。

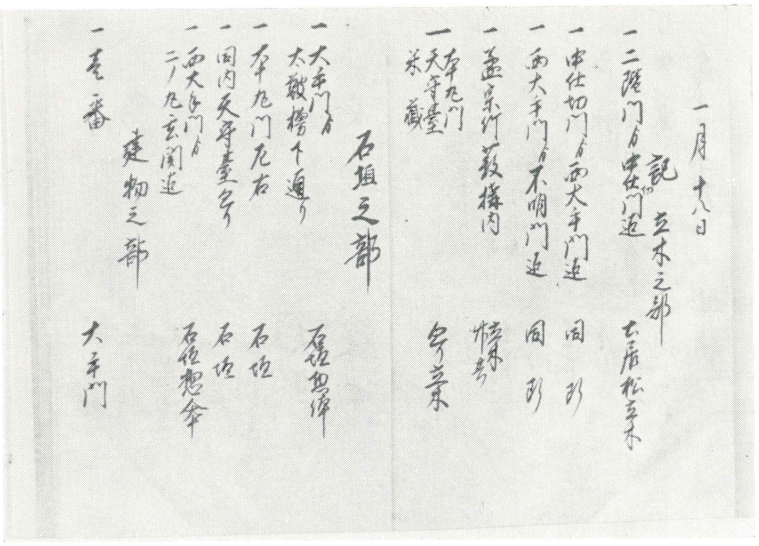
一、天和三年春西新町の入口木戸番所出来す、夫までは木戸なし。

一、同年港口成就の為めに今津弁才天建つ。

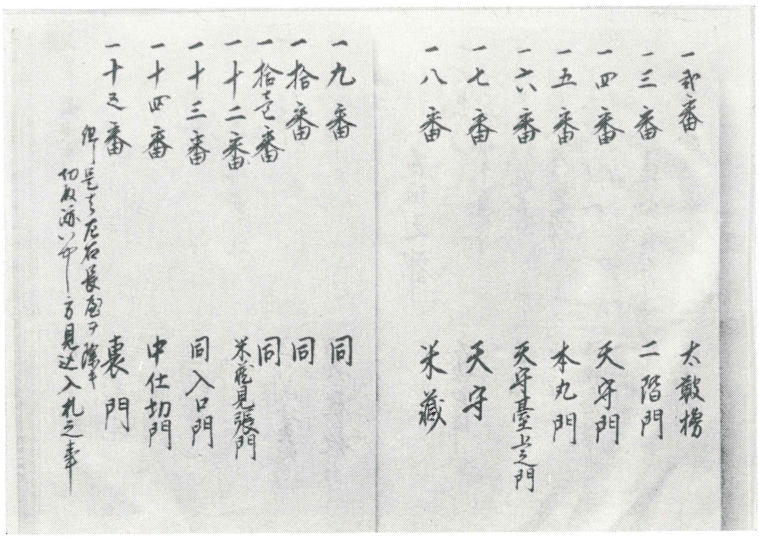
一、元禄十一年四月、大工町の馬場両傍の並木を伐除て其跡田地となる。

第二節　横須賀城の普請と作事

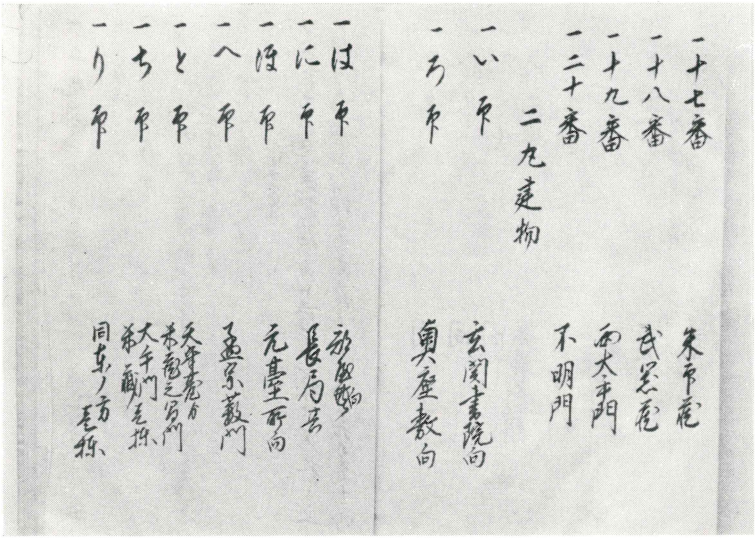
普請とは、土木工事のことで築城における石垣、濠をはじめとする縄張り一切の仕事である。作事とは築城における建築・御殿・城門等の一切の仕事である。普請と作事が両々相俟ってはじめて完成する横須賀城の築城は、二百九十余年の徳川治世下、しかも、幕藩体制下の譜代大名として存続した横須賀城の普請と作事を知る資料は乏しい、しかし、幸いなことに、大須賀町役場には、「横須賀城払下げ入札記録」―明治五年（一八七二）御用留帳―のうちから貴重な縄張りの一端が知られる。



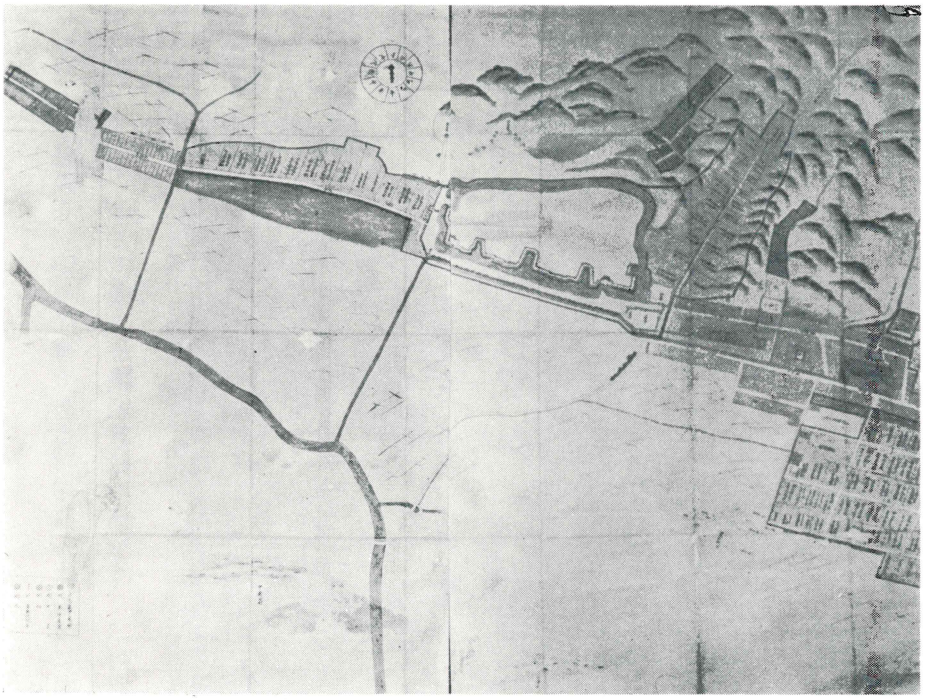
写1―(1)；　明治5年御用留帳より



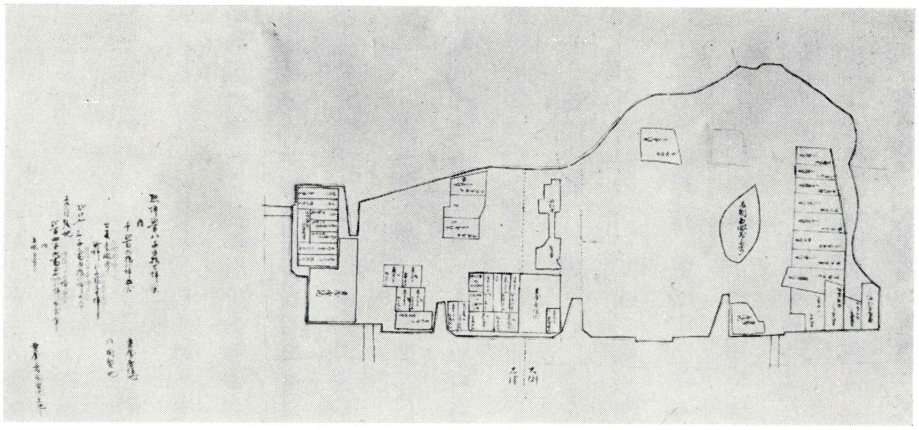
写1―(2)；　明治5年御用留帳より



写1—(3)；　明治5年御用留帳より



写2—(1)；　城址古絵図　（図版写真13—14参照）



写2—(2)；　城　址　古　絵　図（図版写真14参照）

石　垣　の　部　（写1—(1)）

大手門より太鼓櫓下通り

本丸門左右　同内天守台まわり

西大手門より二ノ丸玄関迄

建　物　之　部　（写1—(2)）

大手門、太鼓櫓、二階門、天守門、本丸門、天守台上之門、米蔵、米蔵見張門、同入口門、中仕切門、裏門、武器蔵、西大手門、不明門をはじめ、二ノ丸内に雑居した建造物が記録される。（写1—(3)）

この事柄からして、横須賀城は、石垣を残存する近世城郭といえるであらうか、この石垣は、小笠礫層から発見されるこぶし大以上の石塊で、石工が石切場で採取した石で築城されていない。土留程度のものにすぎない。

また、当時、入札された建造物からみても、横須賀城の平山城に、大手門が二カ所あって、天守台、太鼓櫓が存在したことが知られる。

つぎに、尊重さるべき横須賀城の縄張りを知る資料は「横須賀城の古絵図」である。正徳五年（一七一五）五月の写しの「古絵図」には、天守、太鼓、東門、西門が記録されているだけで、その全貌を明らかにすることはできない。撰要寺、町教育委員会所蔵の「横須賀城総絵図」は、その点、濠の囲繞する縄

張りと、前の建造物の配置が記載され、現地調査と符合する。（写2―(1)―(2)）

しからば、これらの普譜と作事は、記録のうえからみたら、何時行なわれたであらうか、「小笠郡誌所収　横須賀城跡」によれば、〃二代大須賀国千代丸、八才にて家督相続あり後、出羽守忠政と号す。此御代に天守を立つ、城の表向お土居の上、小藪にて堀も水なき掻上堀なり〃とあり、横須賀城は、徳川と武田の両軍が高天神攻防の主導権をとる抗争の間に築城された城であるので、平山城として、敵応山松尾山を頂点とする丘陵に、人工的築城をなしたもので、敵応山松尾山が狼火台の役目を果たし、馬伏塚城・浜松城に通報できる。中世的平山城型式を温存していたことが、横須賀城の縄張りのうちに観察できるのである。

第三節　町指定文化財より知る横須賀城

昭和四十八年二月、大須賀町教育委員会は、横須賀城址とその周辺史跡の学術調査をふまえたうえで、大須賀町文化財専門委員会が答申した文化財を町指定とした。

一、古　記　録

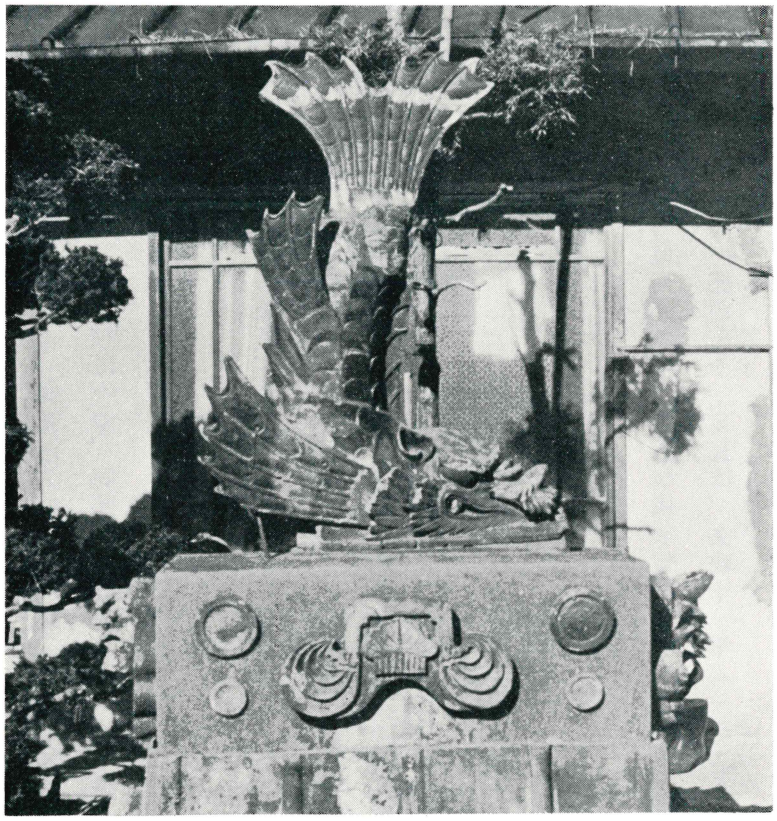
古文書については、横須賀城関係記録として、「西尾隠岐守財産調査控」明治二巳年三月調―三十冊がある。

この記録は、明治二巳年（一八六九）三月、横須賀城解体における城の明け渡しに関する財産目録で、その中に横須賀城の規模、建造物を知る貴重な史料が温存する。

そのうち、「鍵帳覚」は、横須賀城最後の建造物を知ることができるとともに、その建造物の配置をたどることによって、横須賀城の縄張りが知られる。いま、その建造物を列挙し、実測図にあてはめることが可能となる。

追手門（大手門）東門、表門、裏門、御朱印蔵、武器蔵、本丸門、城詰米蔵門、同所西門、城詰門、城詰米蔵、

写1；恩高寺に残る鬼瓦



写2；恩高寺に残る鯱

不明門、山之手門、二階門、天守、天守門、帯曲輪門、奥門、東仕切門、広間塀入口、書院庭口、台所脇路入口、三之丸入口塀重門、湯殿入口、居門庭口、天守裏柵水門、三之丸東柵水門、西入江水門、東入江水門、居間西庭入口、渡廊下庭口、三之丸竹木戸、西曲輪塀重門、五岳之門裏板羽目入口、同所西入口、居間裏入口鍵、城詰米蔵西柵水門、同所東柵木戸、同所中塀水門、不明門木戸、石津東木戸ならびに土蔵、同所門、同所東入口、下台所門、作事門、焔硝蔵、拾六軒町木戸、石津西木戸、北之丸柵門、坂下谷口木戸、坂下谷奥竹木戸、製薬所、奥庭口羽目入口、町番所木戸、稽古場、製薬所門

以上の建造物の鍵が保管されていたことが知られる。横須賀城址は、西尾家城主の時代、本丸、二之丸、三之丸の郭をもち、外部との接触は、追手門、東門、表門、裏門、不明門、山之手門があり、曲輪として、帯曲輪、西曲輪が存在していたことがわかる。この縄張りこそ、天正年間以来の横須賀城の郭の名残りで、東北に蟠居する敵応山松尾山が、二百六十年の太平の江戸時代無用の砦と化し、城門も、不必要なものは、木戸として、通用門化していることが知られる。中世城郭の特色として単郭で始まり、それをつなぐに曲輪をもってした平山城の特色は、江戸末期にても、その名残をとどめていることに注意をはらいたい。

二、横須賀城の鯱と鬼瓦

大須賀町河原崎恩高寺境内に保存される横須賀城の鯱二体、鬼瓦三体は、貴重な横須賀城の遺産である。（写1）

鯱は安政三年（一八五六）丙辰年、三輪村瓦師山本杢左衛門の銘があり、鬼瓦は、文政十一年（一八二八）の作で、鯱の瓦師と同一人である。この鯱と、鬼瓦が建造物の何れにあったのか、即断はさけたい。（写2）

三、横須賀城「二の丸」の井戸枠

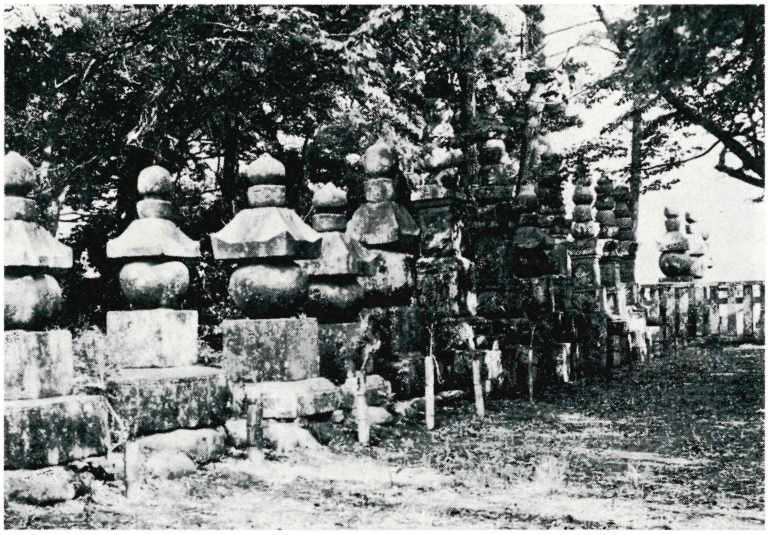
大須賀町石津、戸塚康雄氏所有五三九二の茶畑にあって、「丸に菱」の紋が刻されているから、西尾家の火消定紋と推定される。

四、歴代城主の墓塔

大須賀町 小谷田 撰要寺には、初代 大須賀氏の 墓塔（口絵参照）本多一族の墓塔（写―9）

大須賀町東新町本源寺には井上氏十代十一代城主の墓（写―10）

大須賀町大谷町竜眠寺には、西尾氏第十三代の城主以降の墓がある。（写―11）



写3； 撰要寺にある本多家の墓塔

写4；　本源寺にある井上家の墓塔

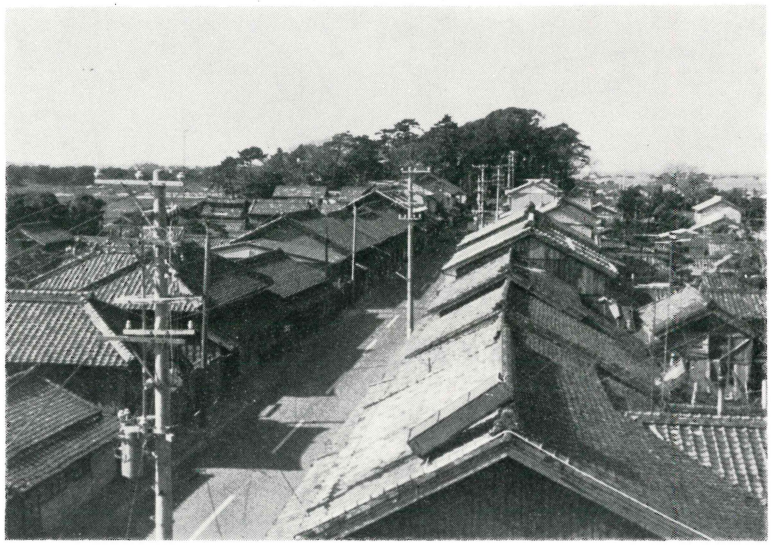
写5；　竜眠寺にある西尾家の墓塔

五、横須賀城の城門

大須賀町小谷田、撰要寺内にある不開門は、一名不浄門といわれ、城中葬儀のときだけ、開門されたという。

第五章　城下町と城郭の構造とその変遷

細井淳志郎



写；　もと足軽屋敷のあった石津の通り（正面の森は八幡神社）

目次

第五章　城下町と城郭の構造とその変遷…細井淳志郎…七三
第一節　城郭と城下町の構造的特色……七四
第二節　城下町の寺院配置とその招致……八四
第三節　城下町周辺の村落と侍町の変容……八五

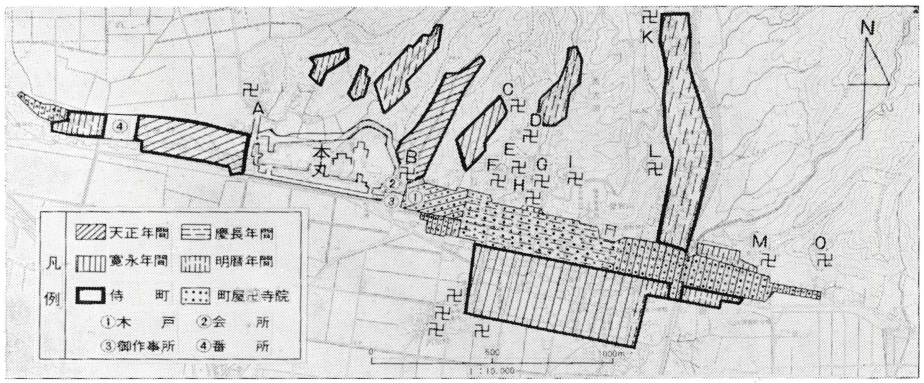


図1；　横須賀城下町の侍町と町屋の変遷区分図

第一節　城郭と城下町の構造的特色

ここでは、封建社会体制の発達に伴う領国施政の中枢である城郭と城下町、それ自体の構成的な特色について、城郭の構造や士庶居住の地域分化などに焦点を置いて、その性格と変遷の検討を試みたものである。

遠州横須賀城は、高天神城の陥落によってその軍事的要塞の意義を喪失したがその後、遠州一円は徳川一色の勢力下に置かれ、大須賀康高侯によって、分国統治における中枢居城へと大きく転換した。その城郭は、背後に小笠山丘陵を控え前方に、弁財天川沖積低湿地、一望に眺められる標高二〇m内外の高台に立地する。また、遠州灘にのぞみ、江戸、上方向け海上交易の中継的な有利地点にあり、すなわち海陸交通の結節点に置かれていた。城下町づくりは、二代城主、松平忠政侯時代、天守閣、空濠、石津の家中屋敷など、城郭内の拡充整備が進められ、同時に町屋（片平町）の町割設定も行なわれた。とくに町屋普請に際しては、建築材料の付与、年貢免許、末代まで諸役免許などの優遇策が行なわれた。このような城下町づくりのプランによって、近世城下町として、基本的な骨格の体裁が整えられた。その後、井上（正利）、本多（利長）両侯の入部にともなって、城下町経営の再編成が促進された。その具体策の一つとして領国内の村里から城下への移住を促進し、さらに先封地の町人移住の定着化などによって、城下

町への人口集中が図られた。また東海道、相良各街道への連絡を前提とした浜街道の道路改修や横須賀港の改修、堀割の開さく事業も行なった。その上、三熊野神社等をはじめ、各寺院の開市設定や、商業地の免税等による商業の繁栄を図かり、しかも、街道沿いの宅地割が実施された。その結果、正徳三年「横須賀城下町の古絵図」にみられるように街状的な城下町が形成された。近世期における幕藩体制の確立、その安定化と相いまって、城下町としての面目とその繁栄は、まさに本多利長侯時代にほぼ確立されたものと推定される。

他の城下町とは、城郭のメカニズムや城下町の機能面で若干異なる特質がみられる。すなわち横須賀城下町は、城郭を核として、第一の郭に重臣家中屋敷群が団塊的に配置され、次に中心商業街区（町屋）があり、その周囲には、下級の家中屋敷群が蝟集している。その外縁には、寺社、町屋、侍町などが混合群状に配列されている。天守閣、本丸、西の丸を包括する城郭の主体部は小笠山丘陵末端、標高二〇m内外の

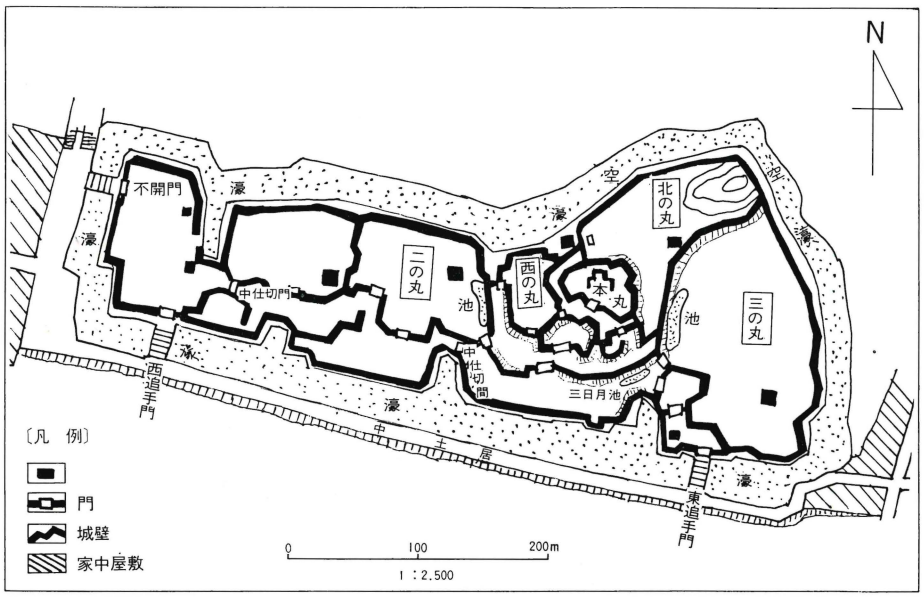
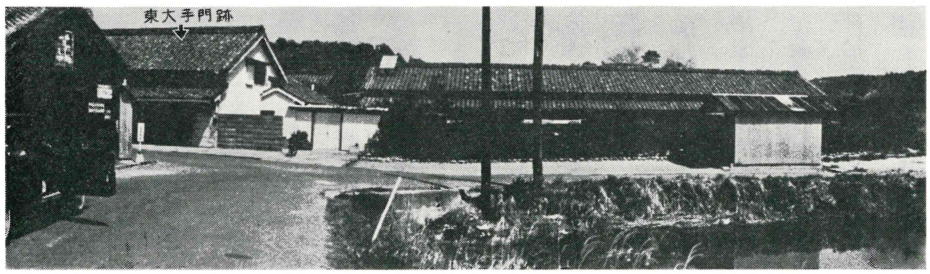


図2；　遠州横須賀城郭址の復原推定図

—寛文4・5年本多利長公時代の古絵図を参照—



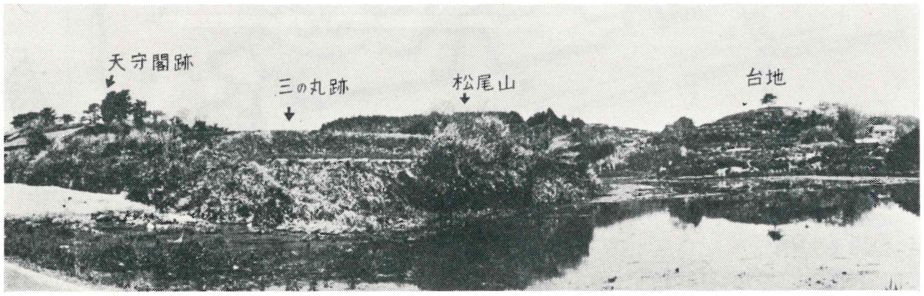
写1；旧横須賀城の東大手門址

高台にあり、その地形的な立地景観からいって、一応、外見上、平山城様式を加備した築城タイプに含まれるものである。また古絵図類にもとづく復原推定図によると、城郭内は、東大手門（写1参照）から本丸に至る要衝の地点に諸曲輪、仕切門、土塁など、本丸を囲続して、等高線に対応して、それぞれが一個の城塞的な役割を備えながら、一連の聯立式配置を呈している。

そこに戦国動乱期を生きぬいた大須賀康高の戦略的評価が如実に反映している。

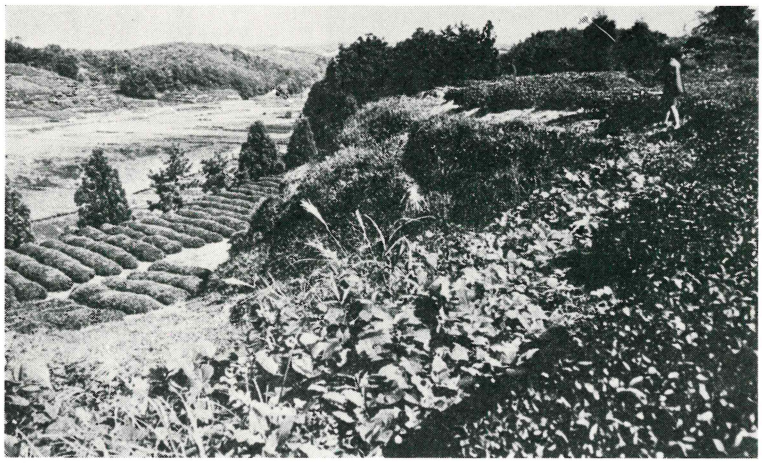
したがって近世初期の城郭でありながら、内容的には、中世末期的な性格を具備した城郭様式ともいえる。

その後、城郭の拡充が促進されたが、とくに本多利長候時代には、城郭主体部の下方、標高七m内外の砂堤および人工的な削平坦地に二の丸、三の丸など、分岐の諸郭が築造された。（写2・3参照）なかでも三の丸は、他郭よりは規模が大きく、東大手門を通じて、直接、城下町と連絡している。かくては、本城の防禦上、他郭よ

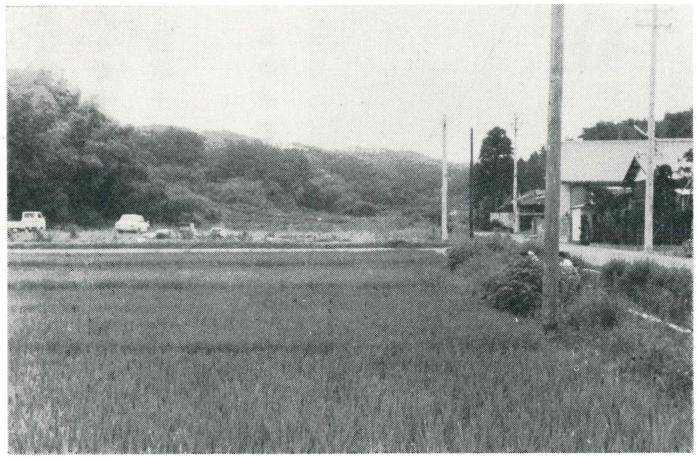


写2；外濠より太鼓櫓址（手前）三の丸址、左手松の木の中に見えるのは天守台址

り整備されていたが、領国時代には、むしろ領国施政の中枢として、役所関係が置かれていたものと思われる。その構えは、平城系統の築城様式を取り入れた典型的な標式である。その上、地形的な標高差に応じて、中世末期的あるいは近世初期的な城郭様式が併存されている。また城郭内の城主居館と武家屋敷との関係は、第三図の復原図に示されるように直線距離約四〇〇m範囲内に蝟集し、いわゆる根子屋式に類似した団塊的配置がみられる。しかし、本多、西尾時代になると、その位置関係は、街状的な町屋区域の外縁、ないしは狭隘な谷筋沿いに散在している。（写4参照）その動機づけは、経済機能を発揮する町屋地域への索引によるものである。一方、城郭の西側は、入江状の潟・沼沢地、あるいは低湿地で住宅



写3；　左手 外濠の址（現在田）右 人物のいる茶畑本丸址
左上は大谷田の谷間



写4；　坂下の谷家中屋敷址付近（旧本源寺の谷）

地の拡大に大きな障害をなしている。

また城郭周辺は、特定給人層の重臣武士集団の屋敷群が多いが、それとは対称的に町屋の外縁に、一般給人とくに下級武士集団の屋敷群がある。概して屋敷地積は、区々で土地条件の制約に対応して、城郭内は小であるが身分差によっては居住地積差もみられる。また侍町の配列は、下級武士、足軽等身分の階層差と関連して、屋敷規模の格差にも反映している。

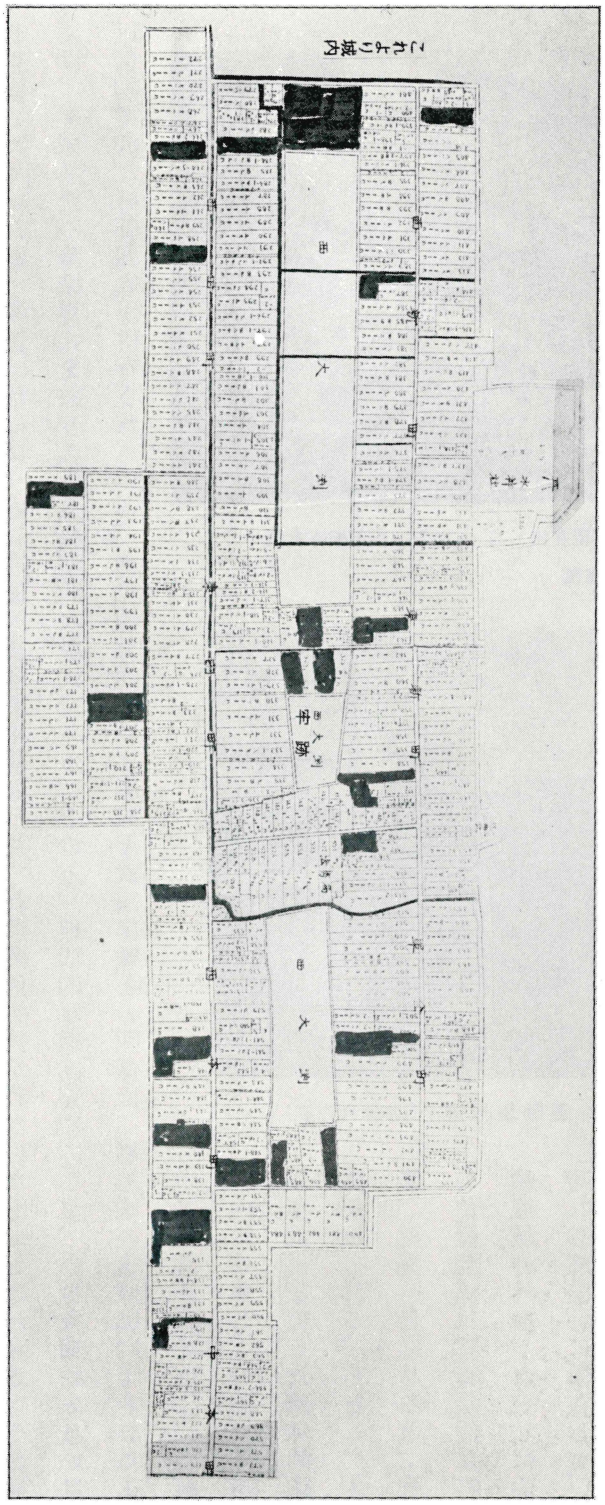
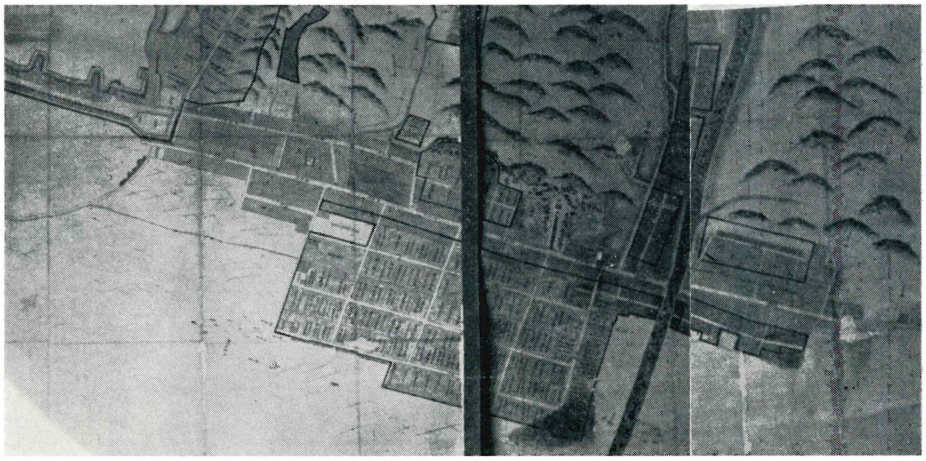


図3；遠州横須賀城下町の宅地割遺構分布図　（黒塗は下級武士集団の屋敷址）

築城当初、城下町づくりは、城郭を中枢として侍町を基軸に促進された。近世中期にかけて、城郭の大々的な改修を契機に、町屋と一体化した侍町との関連づけによって、城下町の拡大がみられた。近世城下町の変質は、士庶居住分化の解体過程の裡にみられるが、その動機づけには、城下町の都市的商業の発達と、在郷農村の商品経済の発達との不均衡によるものがあげられる。さらにそれに呼応して、新興町人の胎動や新旧町人の勢力関係、とくに自由営業の促進などに大きく起因するものと考えられる。その具体的な表現は町屋と侍町との立地的移動、すなわち士庶混住形態の中に見出される。なお封建制度上、侍町と町屋区分は厳存しているが、事実、武士は町屋に転居し、町人は侍町に出店している。しかも役職柄、与力、同心などは、町屋居住が多くみられる。幕末期には、下級武士階級の内職が活発に行なわれた。しかも、十六軒町、川原町、小姓町などの侍町（番町）（写8参照）に境を接する周縁一帯は、士庶混在が目立った。そのことは、明治二年、町人への屋敷貸渡（地籍図地目変更）等の記録や文書資料からも裏付けられる。かくして城下町の士庶居住分化が進行し、従来の身分制都市から地方的な商業経済都市への兆候が現われ始めていた。

近世中期、遠州横須賀城下町は、領内や他藩の年貢米、特産物など、江戸



写5；　横須賀城郭と城下町の絵地図（明治2年）—西尾藩時代の遺稿と推定—

への物資海上輸送の中継的な港町として大いに繁栄をもたらしていた。当城下町の商業中心地は、内海（入江状）と遠州灘を結ぶルート、堀割水路沿いにあたる西、東、両田町や、東新町付近であった。此処は侍町と回漕問屋街、（写8参照）町屋地区との接触地点にあたり、近世中期にかけて城下町第一の賑かさを誇っていた。その後、宝永大地震によって津浪、高潮、洪水および地盤隆起など自然的変化によって従来の港町機能が衰退した。その後、西尾時代には浜街道を媒介とする陸上輸送に大きく転換した。したがって、交易ルートの変容に対応して、その商業中心地は中本町や西東本町・番町付近に（写7参照）転移す

写6；清水家裏庭とその蔵

写7；東本町通り

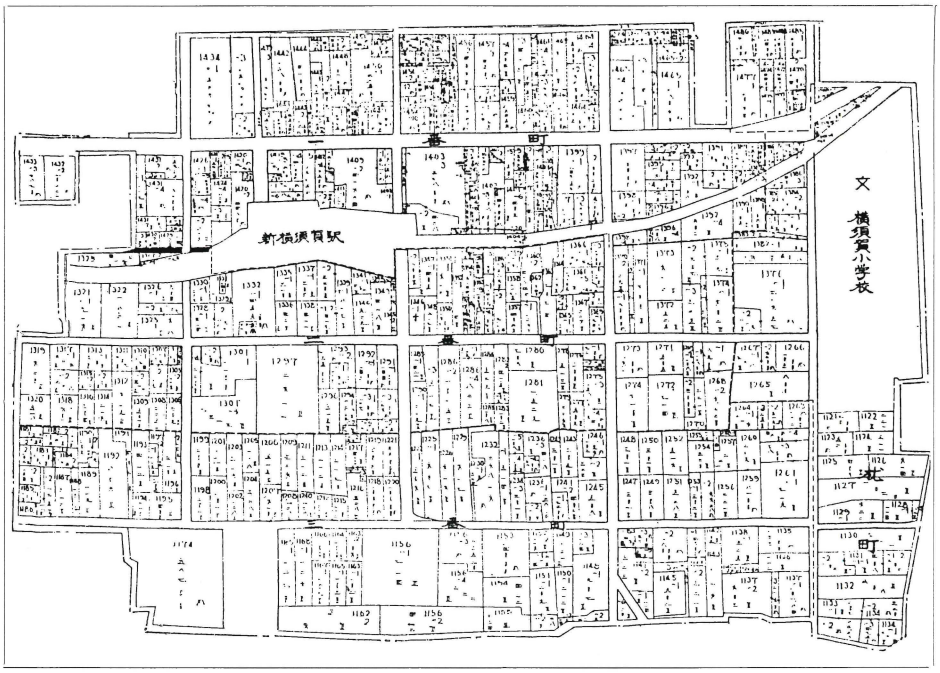


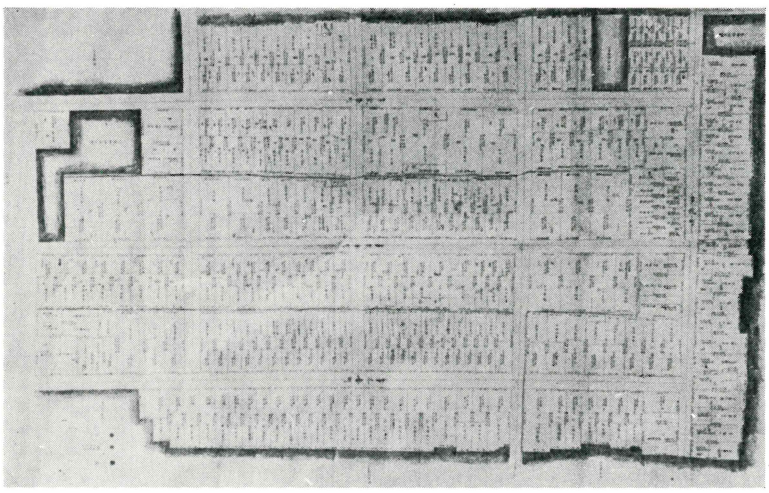
図4；　旧侍町（1番町～3番町）区域の宅地割図

るに至った。その誘引的な動機づけは、領内の在方農村における商品経済の発達、それに伴う消費・流通をめぐる市場の成長充実化に起因するものである。他方、町割型式（図4参照）は、寛政二年の古絵図、大正期の地籍図などで町坪、宅地割をみると、大体、街道沿いに一定の奥行と、分限相応の間口割当による短柵式土地割形態が見られる。また谷筋沿いには徒士、足軽、下級侍町、寺院群、それら対象の町屋等が散在している。しかも西方の城郭周辺は既述したように入江状の潟・沼沢地や低湿地などが展開し、その軟弱地盤などによって住宅造成の伸展上、大きな自然的な障害となっている。

他方、西大谷川の押し出状扇状地は、十分な土地基盤割を行なう余裕に欠けている。そのため街状地割には、東西に細長い地域的な限定が現われている。その上、街状的な町屋南縁、すなわち一番町、三番町などの侍町地区は、その宅地割図（写8参照）からみると、宅地や耕地などの土地利用型式は、用排水路を境目に整然と土地区画されてい

る。しかも、格子状の街路が走向し、一層基盤的な宅地割・形態を展開している。なお、宅地の一部には、身分制に即応して宅坪の大小の混在がうかがわれる。とくに屋敷内は、道路側に宅地、そして裏手の排水路側は畑地に利用されている。このような宅地、土地利用方式は、幕末期に多くみられるが、そのことは不況、凶作、災害などに対する自衛策として下級武士集団が自給自足、すなわち屯田方式的な生活様式の縮図の現われともいえるものである。

また城下町経営の中枢機関には、会所、御作事所、木戸番所（写10参照）などがあげられる。そのうち木戸番所は、天和三年、西尾忠成候が西新町の入口に設けたが、その城郭寄りの位置は、幕末ま



写８；　横須賀城下町における番町、士族屋敷の宅地割図

写９；　川原町通り東より西を望む、突当り西大谷川新橋を望む

写10；作事小屋址

で移動しなかった。そのことは三万石内外の小藩の城下町であり、領内人口を培養する藩域（経済圏）が小さいことにもよるが、その藩域は、第6図、第7図に掲示したように、小笠山丘陵周縁や、太田川下流左岸（旧浅羽庄）、菊川下流平野、その上、西尾時代には、先封地（現藤枝市付近）の一部などが包括し、横須賀城を中心として、半径約十キロ㎞範囲内である。その藩域は、大部分農山漁村地域であるため、年貢米をはじめ綿、茶、薪炭、塩、干魚類などの商品的特産物が多く産出する。近世期における主要街道の一つ東海道筋から融離し、脇街道沿いの位置関係にあり、実質的には殆んど在郷町（兼宿場町）と変わりなかった。本多（利長）侯時代の港町として繁栄と、対称的に町の発達が極めて停滞的であった。それだけに近世期の文化、建築、

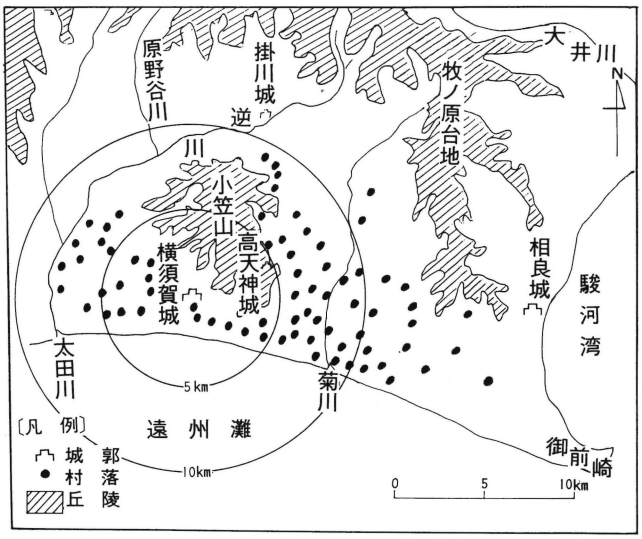


図5；本多越前守利長領内の藩政村の分布図―寛文四年―

風俗、芸能など古き遺産が多く残されていたともいえる。

第二節　城下町の寺院配置とその招致

その典型的な建築様式の遺構として、三熊野神社をはじめ、歴代城主のぼたい寺すなわち撰要寺（大須賀本多氏）本源寺（井上氏）竜眠寺（西尾氏）各名刹があげられる。元来、城下町の寺院配置は、軍事的施設要素の役割として考えられてきた。横須賀城下町は、三万石未満の小藩ではあるにもかかわらず、二十有余の寺院を数え、大部分が町屋の外縁、谷筋、あるいは山麓周縁に多く配置されている。（第1図参照）これは初代城主、大須賀康高候以来、各歴代城主の寺院招致策にもとづくものである。単なる軍事的施設の役割のみではなく、むしろ藩主の領民教化または城下町繁栄を企図したものと考えられる。寺院と職人（寺大工）との結合関係ではとくに扶持職人や被安職人が多くみられた。また足軽、徒士、下級武士などは、研、鞘師、塗師、屋根ふきなどの仕事に従事していた。そのことは、商家と寺町の機能が大きかつたことを裏付けるものである。また寺院には、日蓮宗、曹洞宗、浄土宗など各宗派がみられる。その配置は先述したように狭隘な谷筋に多く、その周囲には侍町が展開している。その配置的な位置から高天神城に通ずる間道沿いにあるところから、一見、外見的には軍事的配慮がなされたようだが、寺院それ自体の由来から、各藩主の所領堅持策の一環として実施

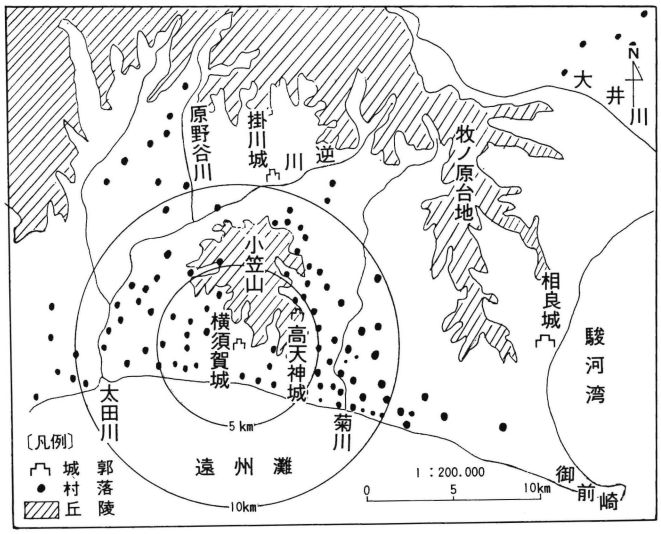


図6；　西尾隠岐守領内の藩政村の分布図—寛延三年—

「西尾隠岐守財産調出控」

町名 / 戸数 / 面積	坂下ノ谷	一番町	三番町	樹木ケ谷	枕町	石津	愛宕下
戸数	19	20	29	9	25	12	7
10坪～20坪	2	0	16	8	15	0	0
21　～30	1	11	13	1	9	0	5
31　～40	8	6	0	0	0	6	2
41　～50	1	3	0	0	0	2	0
51　～60	3	0	0	0	0	4	0
61　～70	3	0	0	0	0	0	0
71　以上	1	0	0	0	1	0	0

されたものである。なかでも初代城主大須賀康高候は、領国施政策として三河の旧領地から招致し、部下の精神統一を図かり、戦国期における軍事的目的を加味した。それによって自己勢力の強化と拡充を図かったものと推測される。西尾時代には寺院の門前で市ないし斎市が期日を設けて開かれ、商取引が行なわれた。かくて寺町を対象とする市場集落の一部（町屋）が形成された。ここに時代の変遷に伴って、軍事的、政治的な性格から教化的、経済的方向へと大きく変質するに至った。この教化策によって地方文化の中心地として、繁栄を維持してきたものである。

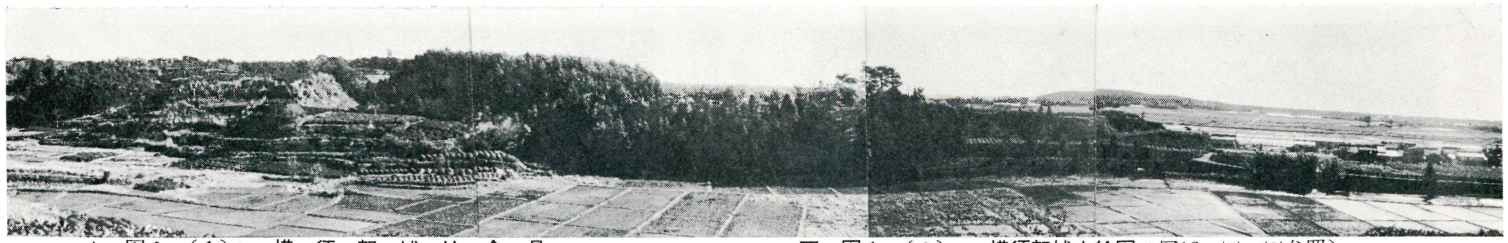
第三節　城下町周辺の村落と侍町の変容

一方、横須賀藩領内の村落群の性格は、江戸中期（寛延三年以降）西尾隠岐守藩内の村名及石高の資料整理から検討すると、大体三〇―四〇戸程度の村と二〇〇―三〇〇戸の規模の大きい村とが、地域的に混在している。そして石高の地域差とほぼ類似している。いわゆる戸数と石高との関係によって、藩政村ないしは「ムラ」と意識される小村と呼ばれるものが多くみられる。また慶長五年の検地には郷名が多く、慶長一五年の検地には、村と称されている。以上の村落の呼称上からいって、中世の村落体制の遺制が近世の藩政村に継承されていたことが裏付けられる。

そのほかに、明治二年「西尾隠岐守財産調出控」の資料から、家中屋敷の坪数を抽出して、その戸数、面積を算出した。それによると概して、横須賀は全体的には、戸数規模が小さい。例えば、坂下の谷は平均化され、侍町としての性格を如実に反映している。他方、一番町、三番町、枕町など、小規模の坪数が多い、そのことは内職ないしは農閑期に、余剰的な労力をもって、商工業に従事する者が多いことを裏付けられる。

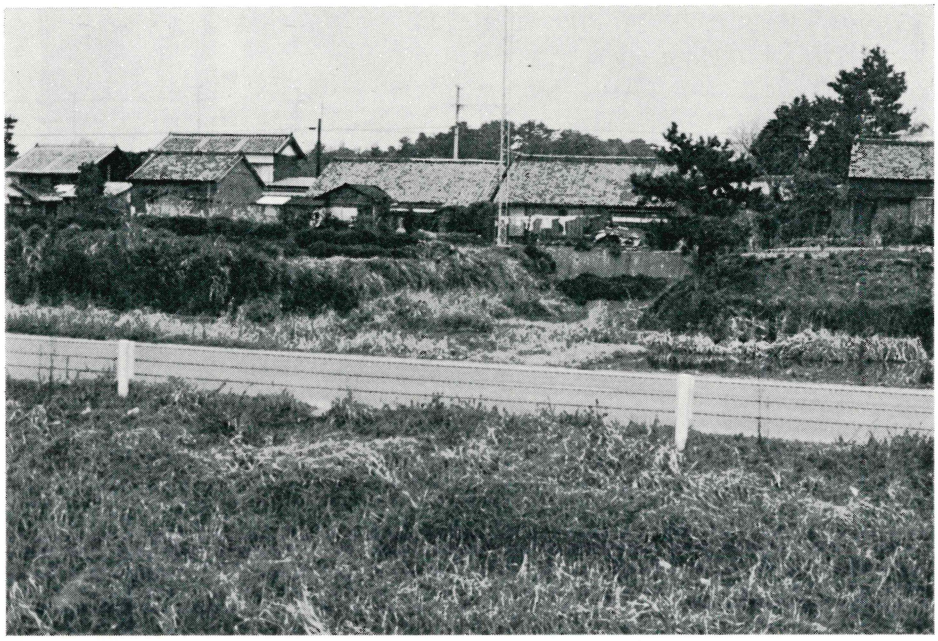
参考文献

一、明治二巳年西尾隠岐守財調出控
一、太田博明氏　文化財調査カード資料（抜粋）
一、松本（島田）豊寿　戦国城下町における給人居住域の研究　人文地理　Vol.22　No.3　(1970)
一、近藤　忠　藩政村の集落構成　人文地理　Vol.19　No.2　(1967)
一、町指定文化財　大須賀町教育委員会
一、松本　豊寿　初期城下町の成立とその概念規定について　地理学評論　(1966)　39巻　10号
一、〃　〃　中世末城下町論　地理学評論　(1965)　38巻　8号
一、〃　〃　近世城下町の変質　近世城下町の都市域構造とその変質について　地理学評請　(1962)　35巻　5号　その①　(1992)　35巻　3号　その②
一、小林健太郎　中世城館の歴史地理学的考察　人文地理　Vol.15　No.4　(1963)
一、山澄　元　近世、明治初期における歴史的領域　藩政村から明治行政村へ　人文地理　Vol.17　No.1　(1965)
一、松本　豊寿　近世の変様式城下町に関する研究　地理学評論　(1959)　32巻　4号
一、三浦　鉄郎　六郷城下町（秋田県）の成立と寺院招致（短報）　地理学評論　(1959)　32巻　10号



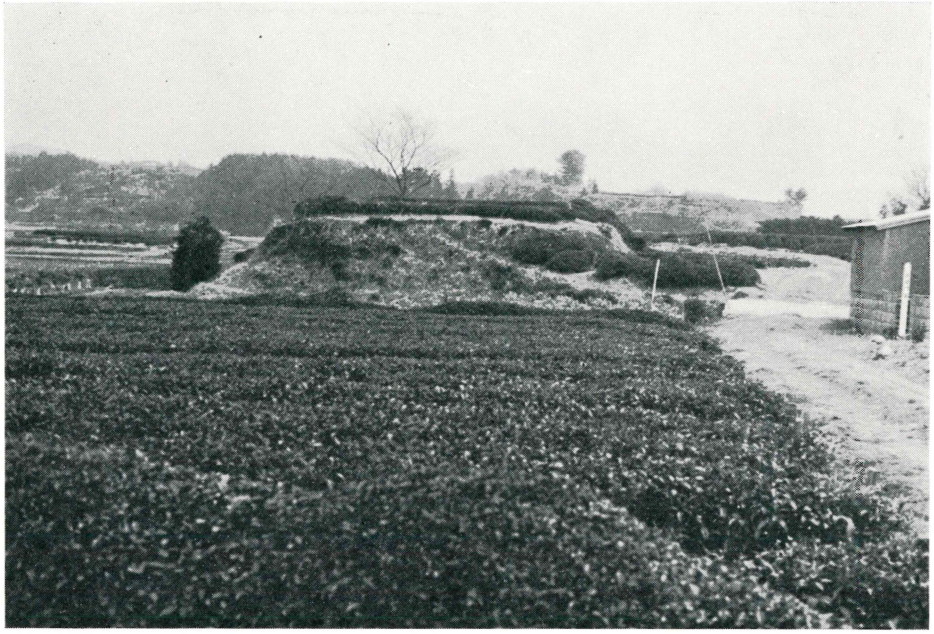
▲ 図1—(1)； 横須賀城址全景

▼ 図1—(2)； 横須賀城古絵図（写12—(1)・(2)参照）



写2—（1）；　東　西　大　手　門　間　の　外　濠

写2—（2）；　隠し濠とも思われる城の南西を囲繞する外濠



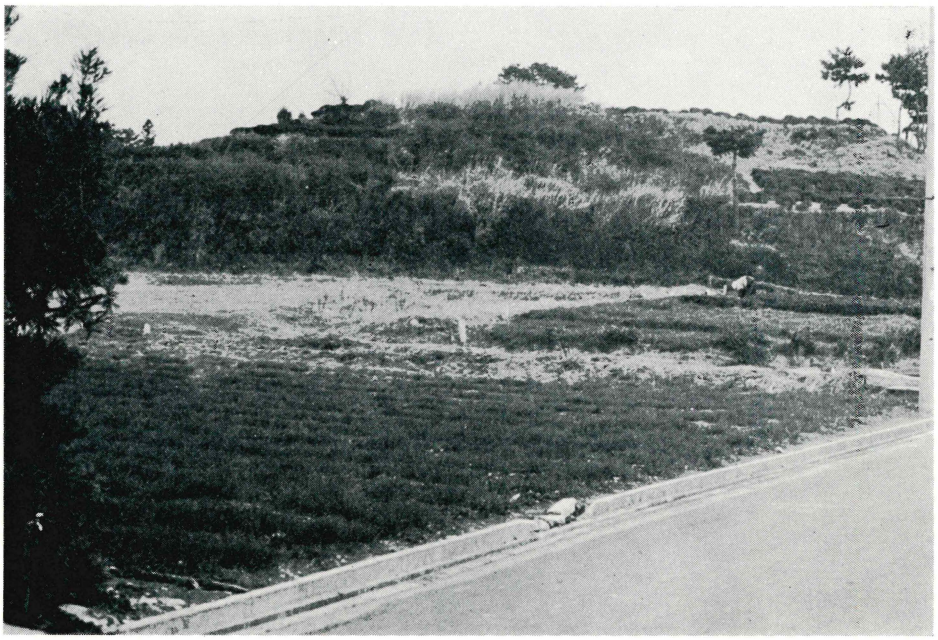
写3—（1）；　不開門址より本丸をのぞむ

写3—（2）；　西北方より横須賀城址をのぞむ

写4—（1）；　本丸址より「西の丸」・「二の丸」址をのぞむ

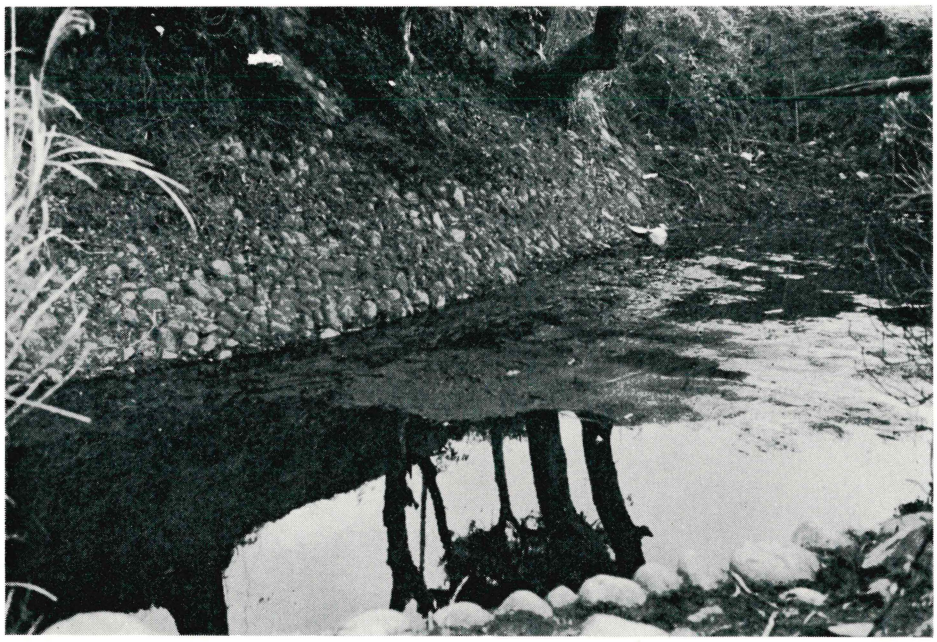
写4—（2）；「二の丸」址に残る土塁址

写5—（1）；　本丸址より「西の丸」・「二の丸」址をのぞむ



写5—（2）；　「二の丸」の削平された址より「西の丸」址をのぞむ

写6—（1）；　三　　日　　月　　池



写6—（2）；　三　日　月　池　の　掻（か）　い　堀　り

写7—（1）；横須賀城天守台址

写7—（2）；天守台址地より発掘される瓦

写8—（1）；　「北　の　丸」　曲　輪　址

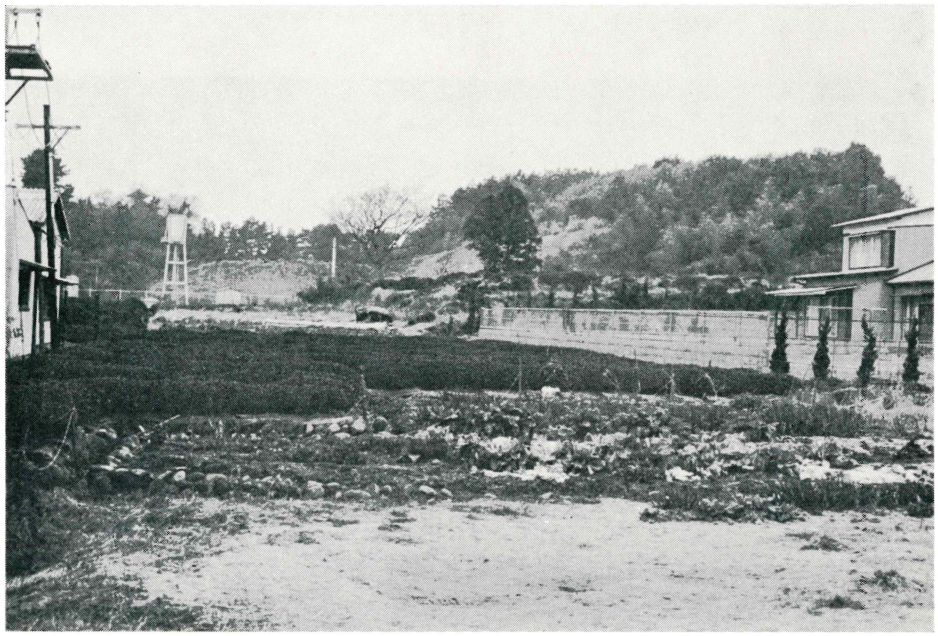
写8—（2）；　「北の丸」と「本丸曲輪」との間の虎口

写9—（1）；　松　尾　山　を　と　り　ま　く　空　濠

写9—（2）；　松　尾　山（一　名　敵　応　山）の　空　濠

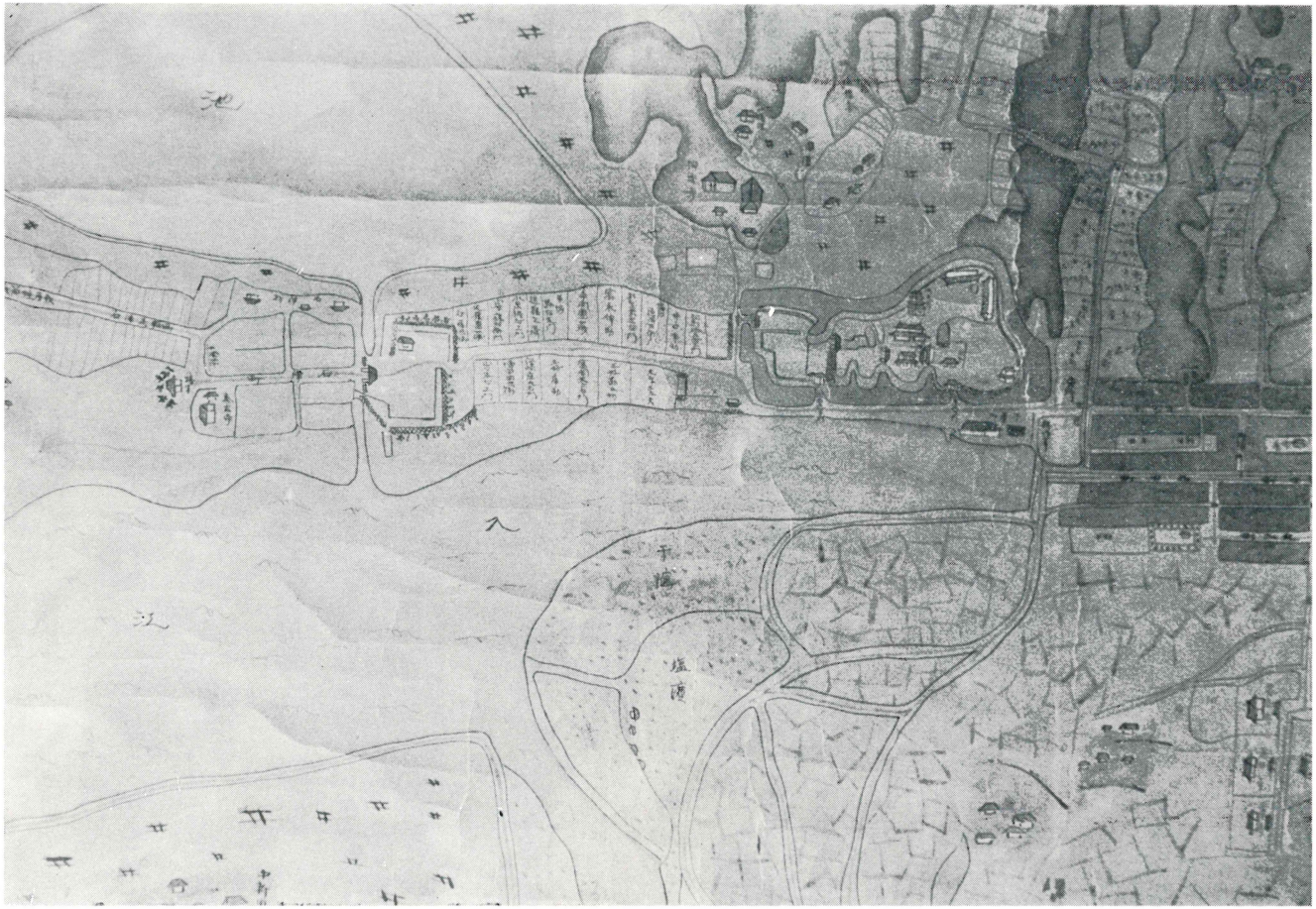
写10—（1）；
北西方台地地形

写10—（2）；
横須賀城址
北面斜面地形

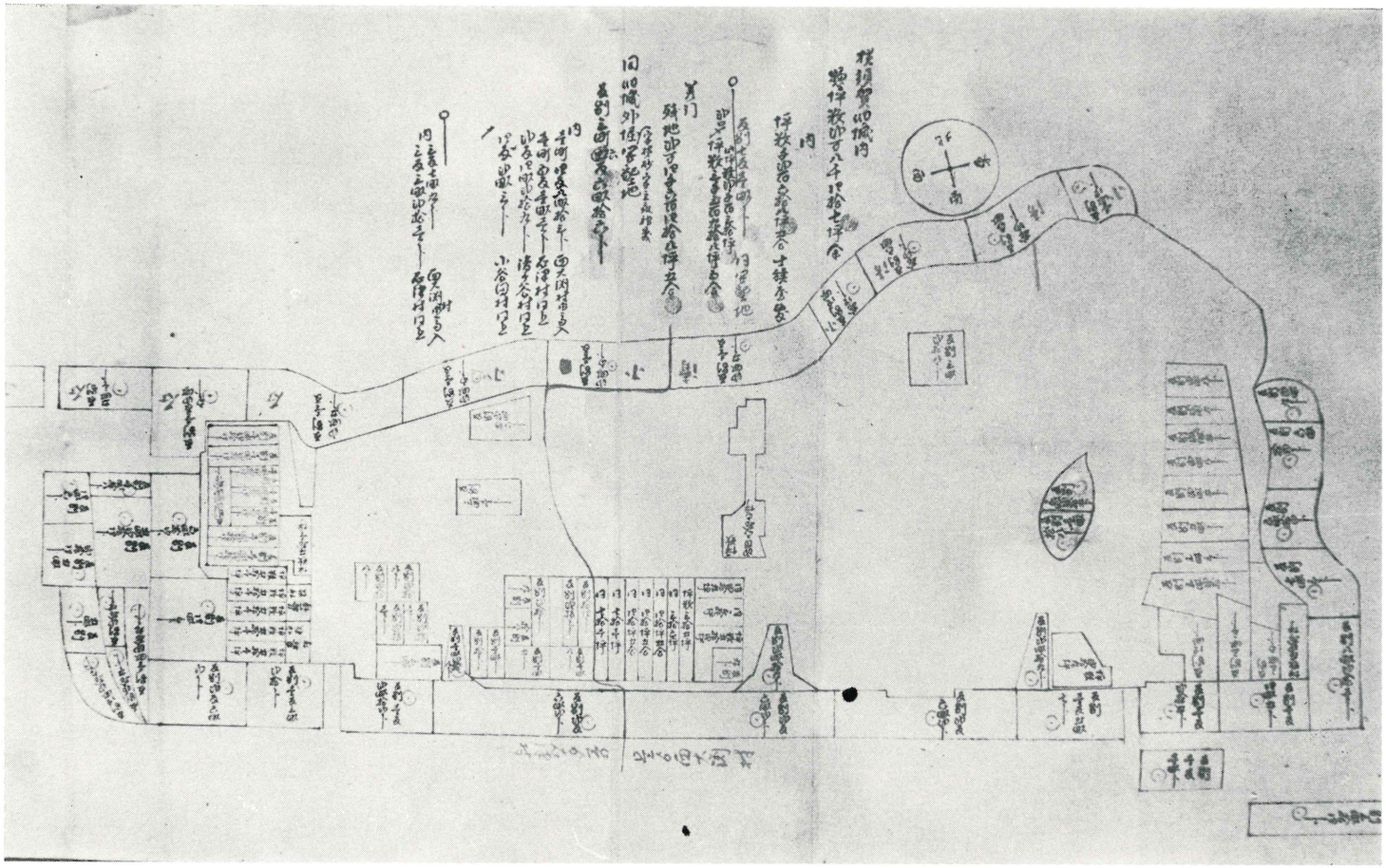


写11(1)；「三の丸」址工場敷地

写11—(2)；横須賀城天守台址（現忠霊殿）



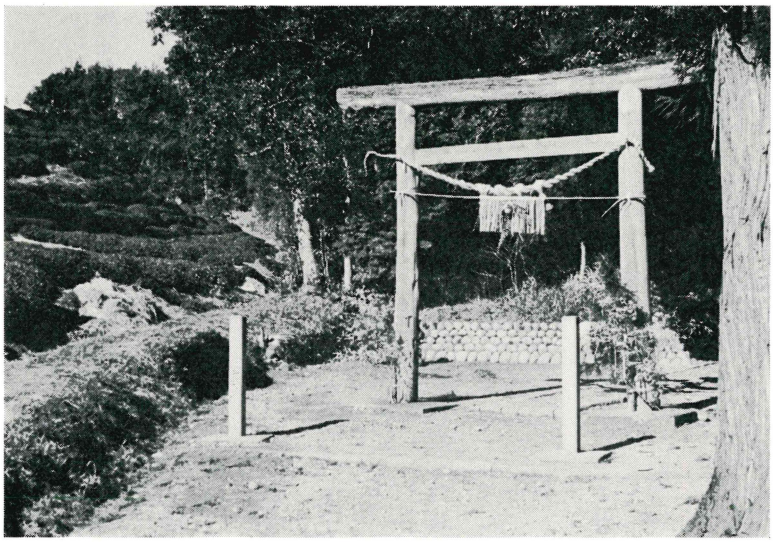
図版12－（1）；　城　址　古　絵　図



図版12—（2）　城　址　古　絵　図

あとがき

安本　博



写；王子権現社

あとがき

われわれが、横須賀城址の調査、研究に入った当初には、よく関係者の中で、「横須賀城の名の起り」について論議された。

「横須賀城根元記」によれば、敵応山松尾城と呼ばれ、「横須賀原始考」によれば〝敵追山〟といい、「王子権現由来記」も〝敵追山〟といわれていて、〝横須賀城〟の名の起りについて議論百出した。しかし、横須賀城址の原点調査、即ち、城そのものの調査、研究が進むにつれて、城のもつ意義が、そこの地名に由来するところが多く、松尾山城、横須賀城といわれるのが妥当ではないだろうかという意見に纏まっていった。

いまでこそ、大須賀町といっているこの土地に、なんといっても、目玉となっているものは、横須賀城址である。〝横須賀党〟とよばれる横須賀衆が安藤帯刀に従って、元和七年紀伊の田辺に土着して、隠然たる勢力を持つようになったのも、もとを質せば、大須賀町の原点に立返った姿に外ならないのである。私たちは、南遠地区に、一拠点を築きあげた横須賀城址のもつ歴史的背景を考えたら、このふるさとの心ともなる横須賀城の破壊は、宥されてはならないと思う。

幸いにして、この些かな調査報告書が、大須賀町の歴史と文化のうえに役立ち、消してはならない心の灯である横須賀城の史跡の保存と顕彰に一役買うなら、私たちの調査、研究の労は報いられたものと思う。

「横須賀城誌」調査執筆者

安本　博　一九一四生、静岡県静岡師範学校専攻科（歴史、地理）卒
現静岡市役所市史編集室主査、日本考古学協会会員、日本人文地理学会会員、静岡県地方史研究会主幹、静岡市史編集専門委員
専攻分野　考古・歴史・地理学、登呂遺蹟発見、学界に報告
論　著
「昭和十八年度登呂遺跡の調査」日本考古学協会編、「登呂」所収、一九四九（毎日新聞社刊）
「駿府城」「続日本の名城」所収、一九六〇（人物往来社刊）
「静岡市史年表」一九六〇（静岡市刊）
「静岡市における町村合併の歩み」静岡市史研究紀要第二号」所収、一九六一（静岡市刊）
「静岡市郷土資料目録」「静岡市史研究紀要第三号」所収、一九六二（静岡市刊）
「駿府」一九六二（静岡市刊）
「静岡市水道の歴史」「静岡市史研究紀要第五号」所収、一九六四（静岡市刊）
「静岡市史料一、二」一九六五（静岡市刊）
「中藁科誌」一九六九（同編集委員会）
「静岡市史・近代通史編」一九六九（静岡市刊）
「静岡市史・近代史料編」一九六九（静岡市刊）
「大谷誌」一九七四「同編集委員会」
「静岡市史・近世史料1」一九七四（静岡市刊）
「静岡市百年史・五三回連載」「広報しずおか」所収、一九六九（静岡市刊）
「徳川家康」「ふるさと百話第一巻」所収、一九七一（静岡新聞社刊）
「風雲児と反逆児」「ふるさと百話第二巻」所収、一九七一（静岡新聞社刊）
「今川盛衰記」「ふるさと百話第三巻」所収、一九七一（静岡新聞社刊）
「用宗町誌」一九七一（同編集委員会刊）
「仮面のさと」「ふるさと百話第六巻」所収、一九七二（静岡新集社刊）
「名園紀行」「ふるさと百話第七巻」所収、一九七二（静岡新聞社刊）
「遠駿豆に分布する城址の探訪」（三七回連載済）「互助新聞」所収、一九七三（静岡県教職員互助会刊）
「史跡めぐり（一一〇回連載中）」「広報しずおか」所収、一九七四（静岡市刊）
「ふるさと（遠・駿・豆）の隠れ里（連載中）」「互助新聞」所収、一九七四（静岡県教職員互助会刊）
「静岡市近代史こぼれ話（五七回連載中）」「静岡百選」所収、一九七四（静岡百選刊）
ほか、論文、著書多数

細井淳志郎　一九二二生、京都帝国大学文学部史学科（地理学）卒
現　静岡大学助教授（教育学部）

専攻分野　歴史地理学・集落地理学

論　著

「大日本百科事典ジャポニカ」全一八巻、一九六七（小学館刊）
「静岡市域に関する地理学的研究序報」小牧実繁博士退官記念論集「人文地理学の諸問題」所収、一九六八（大明堂刊）
「日本の文化地理」全八巻、一九六八（講談社刊）
「静岡市史・近代通史編」一九六九（静岡市刊）
「中藁科誌」一九六九（同編集委員会刊）
「安倍川下流右岸デルタにおける都市化パターンについて」織田武雄先生退官記念論集「人文地理学論叢」所収、一九七一（柳原書店刊）
「用宗町誌」一九七一（同編集委員会刊）
「有度山西周地域における灌漑水利方式の転換について」佐々木清治先生退官記念論集「静岡県の自然と文化」所収、一九七二
「日本地誌　Ⅱ」一九七二（二宮書店刊）
「大谷誌」一九七四（同編集委員会）
ほか、論文多数

神　村　清　一九二三年生　日大高工建築学科卒　一級建築士

現　静岡県文化財専門委員、静岡県農山漁村住宅専門相談員、静岡県公民館連絡協議会民間講師団専門メンバー、久能山東照宮文化財保存顕彰会理事、静岡県建築士会理事、静岡県文化財保存協会理事、静岡県地方史研究会副主幹、静岡県市建築士会静岡支部支部長、神村建築造園設計事務所長

論　著

「中藁科誌」一九六九「同編集委員会刊」
「古民家」「ふるさと百話」第二巻所収、一九七二「静岡新聞社刊」
「明治の建物」「ふるさと百話」第八巻所収、一九七三「静岡新聞社刊」
ほか、論文多数

MEMO

MEMO

MEMO

MEMO

昭和四十九年三月二十五日印刷
昭和四十九年四月　一　日発行

遠江国横須賀城址
調査報告書

編者　安本　博

発行者
静岡県小笠郡大須賀町
大須賀町教育委員会
印刷所
静岡市若松町七十六番地
静岡英文印刷株式会社